ライフスキル獲得や社会人基礎力育成を意図した
体育実技授業におけるゲートボールの可能性と展望

○梶田和宏（筑波大学）
松元　剛（筑波大学）

キーワード：教育的価値、教材開発、大学体育(PEHE)、生涯スポーツ、ゲートボール再生プロジェクト

1. 背景

ゲートボールは、日本発祥（北海道芽室町）のスポーツとして世界50ヵ国以上へ競技人口の広がりをみせてきた。一方で、日本ゲートボール連合（以下、JGU）（2020）によると、国内における登録会員の競技人口は1980年代の60万人超を頂点に減り続け、2016年には初めて10万人を割り込み、その後も毎年約1万人ずつ減少し、その85%を70歳以上の高齢者が占めていると報告されている。新たな参加者の獲得とゲートボールの普及が課題となっている中で、2019年にJGUが「ゲートボール再生プロジェクト」をスタートし、長期的な視点に立って競技者だけでなく、全世代の多様な人々が様々なかたちで参加できる愛好者を増やし、「レジャー&コミュニケーション+競技スポーツ」としてのゲートボールを目指すことになった。

ゲートボールの現代的価値である「①開かれたチームスポーツ」、「②コンパクトで気軽なチームスポーツ」、「③知的でモダンなスポーツ」を「小学生」、「大学」、「ネット&ゲーム」を重要拠点として提供する「ゲートボール“beyond2024”構想」が示された（JGU、2020）。まず、ゲートボールの体験機会を提供することの重要性に着目し、「小学生」と「大学生」を主なターゲットとすることは、まさに小学校と大学・短期大学における体育実技授業こそが、その実施と実践の役割を果たすと考える。

近年における子ども教育の変化に伴い、競技スポーツ、レクリエーション・スポーツとしての両面を持つゲートボールがもたらす効果・魅力が再認識されている（笹川スポーツ財団、ONLINE）。また、ゲートボールのゲーム様相と戦術的競技特性に関する研究（松元ほか、2020）では、ゲートボールの特有の競技特性が教材としての教育的価値があると報告されている。さらに、体育授業やスポーツ活動を通して、身体的能力の他に、心理社会的な能力を高めることに注目した研究が大学体育（PEHE）で多く行われている。体育実技授業におけるゲートボールの可能性と展望を検討する上で、心理社会的側面の獲得・育成を意図した教材としての教育的価値を分析するには、一定の類似性がみられる「ライフスキル」と「社会人基礎力」（石道ほか、2016）を対象とすることが適当であると考える。

2. 目的

本研究では、ライフスキル獲得と社会人基礎力育成の観点から、体育実技授業におけるゲートボールの教育的価値とその可能性を文献資料等の記述を参考に検討し、ゲートボールの教材開発に向けた展望と展開を明らかにすることを目的とした。

3. 方法

社会人基礎力の12の能力要素の項目（経済産業省、2006）とライフスキルを構成する10の主要能力の項目（WHO、1997）について、文献資料等に記述されているゲートボールの競技特性やその特徴・効果などを整理した。具体的には、ゲートボールの指導書やWebサイトの記事および国内外におけるゲートボールに関する先行研究の知見から該当する内容を抽出し、各々について検討した。

4.. 結果と考察

本研究を通して、「ライフスキル」と「社会人基礎力」の観点から、体育実技授業におけるゲートボールの可能性と展望が示唆された。結果と考察の詳細は、会期に発表資料で報告する。「3対3のイージーゲートボール（Easy Gateball）を、生涯スポーツに繋がるゲートボール教材として紹介する。

【付記】
本研究は、公益財団法人日本ゲートボール連合（JGU）「ゲートボールの普及と体育での活用に関する研究」の助成を受けて実施されたものである。